

奈文研の旧石器研究

—奈文研って、旧石器研究をしていたの？—

加藤 真二

奈良文化財研究所 副所長

1. はじめに

奈良文化財研究所（奈文研）というと、多くの人は、やはり、平城宮跡や飛鳥藤原宮跡を対象とした古代都城制の調査研究を思い浮かべるだろう。私を含め、今回、お話をする4人も、通常は、そうしたことに関わる業務をおこなっているが、それとともに、いわゆる2足の草鞋を履いて、旧石器研究を進めている。また、この4人以外にも、旧石器研究を専門としている日本学術振興会特別研究員1名を受け入れているほか、今は足を洗ったと称したりしている、大学や大学院で旧石器研究をした者が2名ほどいる。

実は、日本には、これだけの人数の旧石器研究者（学生・院生を除く）を抱えている大学や調査研究機関はないので、奈文研は、日本最大、日本を代表する旧石器の研究所ともいえる存在である。そして、奈文研には、これまで、多くの旧石器研究者が在籍していた。特筆すべきは、日本の旧石器専門の学会である日本旧石器学会の会長2名（稻田孝司先生、小野昭先生）を輩出していることだ。また、瓦研究で知られた山崎信二、飛鳥資料館学芸室長であった岩本圭輔、文化庁から転任してきた岡村道雄、現在、ACCU（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）所長の森本晋の各氏なども旧石器研究者だった。また、現役の大学教員で、旧石器考古学を教えていた東北学院大の佐川正敏先生、若手では、慶應の渡辺丈彦先生や東大の森先一貴先生も奈文研OBである。

2. 日本の旧石器研究への奈文研の貢献

このように、過去も、現在も多くの旧石器研究者が所属した奈文研だが、日本の旧石器研究に実に大きな貢献をしている。

それに触れる前に、一旦、日本の旧石器研究の始まりに話を戻すことにしよう。皆さんは、今回の講演会のチラシに昭和100年のロゴマークが入っているのに、気が付かれただろうか？「なぜ、旧石器の講演会に、昭和100年のロゴが？」と思われる方も多いことだろう。それは、日本の旧石器研究が昭和、あえて言えば、昭和20年のアジア太平洋戦争の敗戦後に、本格的に開始されたことから、昭和という時代が、日本の考古学研究・旧石器研究にとって、エッポクメイキングとなる時代だからだ。もちろん、具体的にいえば、昭和21年の相沢忠洋さんによる群馬県岩宿遺跡の発見であり、昭和24年の明治大学による同遺跡の発掘である。ただ、先程も昭和20年の敗戦後と言ったが、それ以前は、記紀に記載された神話にもとづく史觀や日本には旧石器時代はないという常識の下、日本では自由に旧石器研究を行うことができなかつたのだ。敗戦の結果、それらのくびきから解かれたことで、岩宿の発見・発掘につながったといえる。

さて、このように、戦後直後に、本格的に始まった日本の旧石器研究だが、旧石器研究の方法、用語などは、すべて、当時、旧石器研究の中心であったヨーロッパのものを手本としていた。

ここに、戦後、最初に出された旧石器遺跡の発掘調査報告書である市立函館博物館の

『樽岸』(昭和31年4月)、明治大学の『群馬県岩宿発見の石器文化』(昭和31年8月)がある。前者は、現在の北海道寿都郡黒松内町に所在している樽岸遺跡の発掘調査報告書、後者は、言わずと知れた、現在は群馬県みどり市の岩宿遺跡のものである。両書には、美しい石器の実測図が載っている。いずれも、のちに東北大学にあって、日本の旧石器研究の第一人者となる芹沢長介先生が描いたものだ。芹沢先生は、人間国宝の染色家、芹沢鉢介さんのお子さんで、かつ、著名な写真家である土門拳さんのお弟子さんという方。優れた芸術的素養があったことから、こうした実測図を描くことができたのだろう。そもそも、ヨーロッパでは、実測図は専門の画家が描くものなのだ。

しかし、現在は、このような実測図を描くことはない。ここに、岩宿遺跡で出土した局部磨製石斧の実測図(図1)がある。真ん中の図が報告書に載っていた芹沢先生によるフランス式の図、右が現在の描き方による図である。現在の図は、石器表面の大小の割れ面(剥離面)を正確に表現するとともに、各剥離面に、リングやフィッシャーと呼ばれる剥

離面が割れたときに付く、特徴的な傷が描かれている。これは、研究者が自身の石器の剥離面の観察をもとに描くもので、私を含めて、今日、お話しする4人もこうした実測図を描くことができる。私も今年62歳で、老眼で大変なのだが、石器実測の現役で比較的うまいほうだとうねぼれている。この現在の実測図は、剥離面とリング・フィッシャーで、石器を作る際の石の割れ方と順番を表現したもので、それなりの訓練・学習をした者が見れば、その石器がどのように作られていったのかを見て取ることができるのだ。

こうした石の割り方、作り方に着目した石器の観察法と図化は、奈文研の埋蔵文化財センターに長らく在籍し、奈文研退職後は、みどり市岩宿博物館の館長をされ、先年亡くなられた 松沢 亜生 さんの研究にもとづいている。また、その日本全国への普及にあたっては、私は、埋蔵文化財センターが昭和49年(1974)から行っている埋蔵文化財発掘技術者研修(現・文化財担当者研修)とその前身の文化財保護委員会(現・文化庁)と奈文研が昭和41年(1966)から共催した埋蔵文化財発掘技術者研修会が大きな役割を果たしたとみ

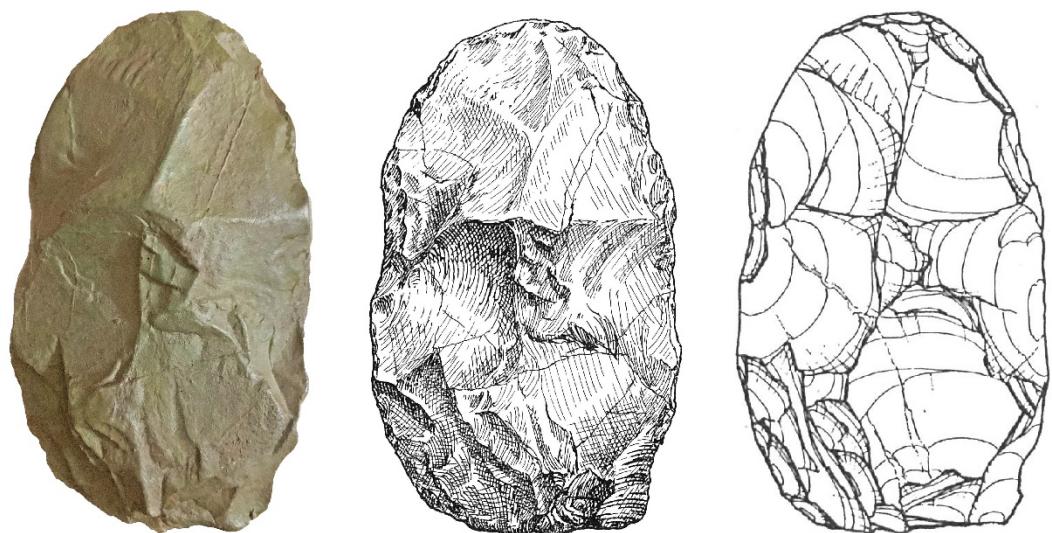


図1 岩宿遺跡出土局部磨製石斧(左)の実測図

中: 杉原 1956、右: 群馬県史編纂さん委員会編 1988

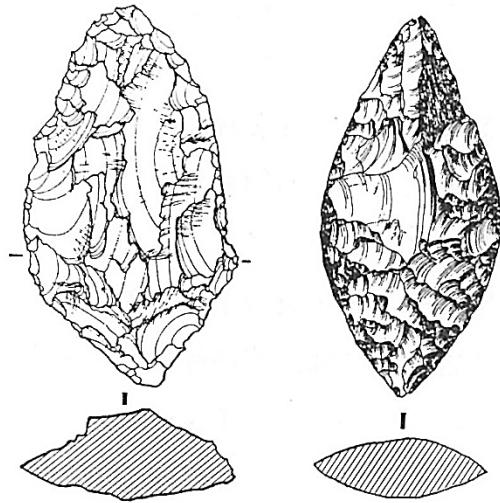


図123 打製石器の表現法2種
左 剥離面の切合を表現 新潟中林遺跡
右 影をつけ立体感を出す 長野男女倉遺跡

図2 『発掘調査の手びき』の図123

ている。今、奈文研の研修、そして全国の埋蔵文化財調査員や考古学徒のテキストとなっていた『埋蔵文化財 発掘調査の手びき』の初版(1966年)の挿図をお見せしよう(図2)。ここでは、日本式の実測図(左)とフランス式の実測図(右)をあげながらも、「実測は写真撮影ではなく、すべてを忠実にえがくのが目的ではない。図に何をあらわすか、それがなによつて生じたものか、それを表現するにはどのような方法をとるべきか、それをきめるのは実測者の見解のみであり、それを具体化する方法はたんなる技術にすぎない(191

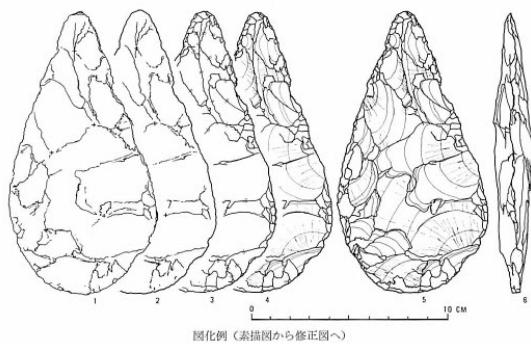


図3 図化器による石器実測(松沢1979)

ページ)」と明記しており、明らかに、研究者の石器観察にもとづいて復元された石器製作のプロセスを表現する日本式実測図を推奨している。そして、前述の松沢さんは、昭和48年(1973)に奈文研に入所し、翌年、埋文センターが設立されると、そちらに移り、研修や石器図化器の開発(図3)などを通じながら、日本式実測図の水準の向上と普及に尽力されたのだった。

このように、奈文研は、日本の旧石器研究の基本ともいえる石器の観察法と観察結果の図化の標準化とその普及に貢献したといえるのだ。ちなみに、この日本式の実測図は、現在、韓国や中国の一部研究者も取り入れておらず、徐々にだが、広がりを見せている。

ところで、私が1993年10月に奈文研に入所した時、まだ、松沢さんは、埋文センターの考古計画研究室長として在籍されていた。そして、その年の大忘年会か、翌年の親睦会の時に、面と向かって「君、奈文研に入ったのなら、旧石器研究をやろうと思ってはいけないよ」と言われたことを今なお記憶している。なんと答えたかは忘れてしまったが。

3. なぜ、奈文研が旧石器研究するの?

それでは、この松沢さんの意見に反し、いま、なぜ私たちは、奈文研で旧石器研究をしているのだろうか?

ここからは、私の個人的な考え方である。それは、奈文研が文化財の総合的な研究のナショナルセンターだから。私たちの研究とは、さまざまな文化財を将来に継承するために、それら文化財を学術的に評価することだ。それは、飛鳥・奈良時代の文化財に限るものではない。旧石器時代の出土品や遺跡についても、当然、対象になる。のちほど、国武さんが話すような、これまで知られていなかったようなものが出土した場合にでも、それが何であり、どのような価値をもつものかを的確に評価するとともに、そうした評価を下すた

めには、どのような調査・分析を行う必要があるかを示す必要があるのだ。ナショナルセンターとしては、「これまでなかったものなので、分からぬ」では、いけないのだ。

また、内外の旧石器の調査研究の成果が、日々蓄積されるとともに、新たな手法も生み出されている。近年では、古代ゲノム研究や年代測定、古環境復元といった周辺領域の研究が急速に進展している。この結果、既存のものに下されていた評価を改めなければならぬ事例が出てきている。例えば、北海道の旧石器編年などが良い例だ。これまで、比較的新しい、旧石器時代末のものと考えられてきた、いくつの石器群が、調査事例の蓄積と新たな年代測定によって、かなり古い段階のものであると説かれるようになってきている。

奈文研には、常に文化財の評価が的確なものであるように、内外の調査研究の最新成果をフォローし、必要に応じて、それを周知する役割もあると考えている。

4. 奈文研の旧石器研究の特徴

私は、旧石器研究あるいは考古学にとどまらず、奈文研の研究には、①研究の最前線を行く、②国際性という特徴がある、あるいは、あるべきと考えている。そして、この2点は、お互いに関連していると思っている。

今、世界の旧石器研究の最もホットな課題の1つが「私たち現生人類（解剖学的現代人[Anatomical Modern Human]、ホモ・サピエンス・サピエンス[Homo sapiens sapiens]）が、いつアフリカを出発し、どのようなルートで世界各地に広がっていき、どのように、各地の先住集団と置き換わり、自然環境やその変化などに適応していったのか？」ということだ。この課題をめぐり、世界中の多くの旧石器研究者が、日夜、調査研究を繰り広げている。これについて日本列島を舞台に考えると、「ユーラシア大陸の東縁に位置する日本列島に、いつ、どこから旧石器文化が流入し、どのように列島内で広って、列島の最基層の文化が形成されていったのか？」という問いに置き換えることができる。もちろん、列島へ



図4 2021～2025年の奈文研の旧石器調査

●：調査した遺跡・研究所・大学等, ○：研究所等で調査した石器の出土遺跡

の旧石器文化の流入は1回だけではなく、時期、ルート、石器群の内容を変えて、何回も行われたことだろう。

いま、私たちは、列島の基層文化の形成に関する研究を行うことで、世界の旧石器研究における最もホットな課題の1つである「現代人の拡散と適応」に果敢に取り組んでいるのだ。

また、列島の基層文化の形成を解明するためには、日本列島の旧石器と海外の旧石器の比較検討のほか、海外の旧石器の変遷等を把握する必要がある。このため、図4に示したように、私たちの調査は、日本列島を広くカバーしているだけでなく、西はフランス・パリにまで足を延ばしている。そして、調査研究の成果も国内での日本語による公表だけでなく、当然、海外の雑誌や学会での外国語による発表も行うことになり、研究が必然的に国際性を帯びることになるのだ。

5. 奈良市法華寺南遺跡の石器群

それでは、最後に、いま、私が考えている今回の秋期特別展「ナラから平城へ」に展示している奈良市法華寺南遺跡の旧石器（奈文研 2003）について、奈文研的な視点による初步的な評価を示してみたい。

法華寺南遺跡の石器群の最大の特徴は、小石刃の剥離と、剥離された小石刃を素材とする小型の背付き尖頭器（*backed point*、ナイフ形石器）にある（図5上）。実は、これらはユーラシア各地の後期旧石器前葉石器群（EUP: Early Upper Paleolithic）の特徴でもある。EUPに先立つ後期旧石器初頭石器群（IUP: Initial Upper Paleolithic, 5.0~4.0万年前）からEUP（4.5~2.5万年前）の時期は、石刃技術やこの小石刃技術といった従来よりも高度な技術をもつ新人集団が、旧人や古いタイプの新人（古代型新人：*Archaic Homo sapiens*）といった先住集団の生存環境をも居住域とし、それ



図5 法華寺南遺跡の小石刃石核・背付き尖頭器(上、奈文研 2003)と小石刃技術をもつ

EUPの分布(下) ()内の数字の単位は万年前、例：4.5=4.5万年前=45000年前

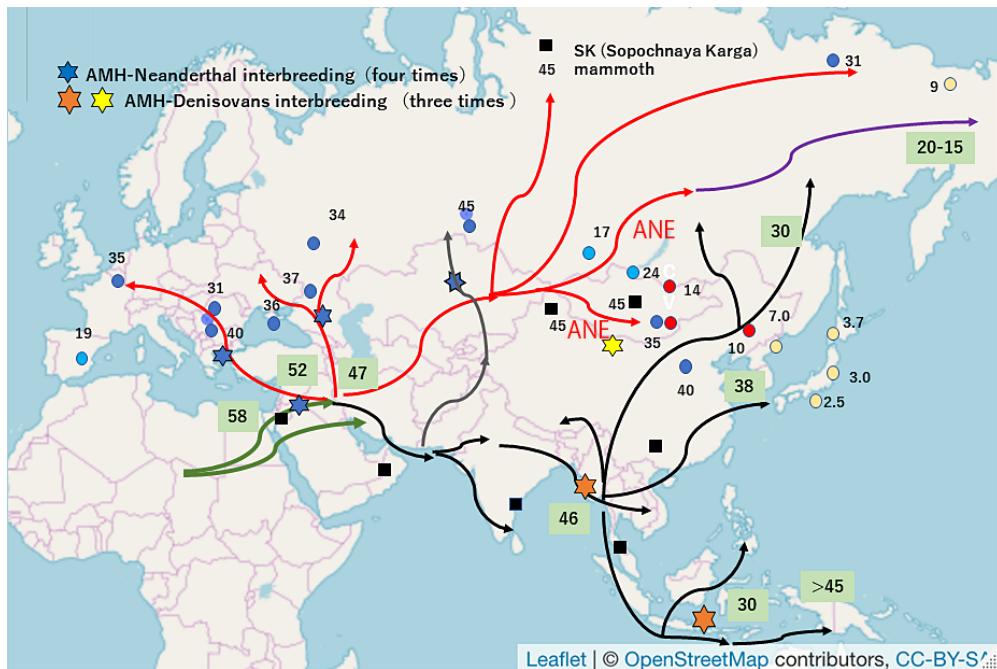


図6 ゲノムからみた現生人類の初期拡散ルート（高畠2021に加筆）

(図中、ANE は古代北ユーラシア集団。数字の単位は千年前、例：30 = 30 千年前 = 3 万年前)

らと置き換わりつつ、文化の拡散と定着を達成する時期とされている。

ユーラシア東部のアルタイ、シベリア、モンゴル、中国北部、朝鮮半島でも小石刃技術・小石刃素材の背付き尖頭器が EUP 期に見ることができる（図5下）。これらは、古代ゲノム分析によって想定されている同時期にユーラシア北部を西から東へと拡散してきた新人集団：古代北ユーラシア集団（ANE: Ancient North Eurasian、図6）が持っていた技術であり、この ANE の流入あるいは、それとの接触によって伝播したと考えられている（西秋・野林 編著 2025）。このため、EUP と並行する時期（約 3 万年前）の法華寺南遺跡の小石刃技術も ANE のユーラシア東部への拡散に起因する技術伝播の波が、古本州島にも及んだこと、そして、大陸とは陸続きになっていたいなかった旧石器時代においても、古本州島は隔離された閉じた世界ではなく、大陸の状況が反映される開けた世界であったことを示すものと評価できるのだ。

参考文献

群馬県史編さん委員会編 (1988) 『群馬県史 資料

編1 原始古代II 旧石器・縄文』 群馬県

市立函館博物館（1956）『樽岸』市立函館博物館

杉原莊介 (1956) 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告 考古学 第1冊

高畠尚之 (2021) 「上部旧石器時代の北ユーラシアの人々に関するゲノム研究」『パレオアジア文化史学 計画研究 B02 2020 年度研究報告書』, 27-44

奈文研 (2003) 『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告 旧石器時代編 [法華寺南遺跡]』 奈文研学報第 67 冊

西秋良宏・野林厚志 編著 (2025) 『パレオアジア
新人文化の形成: 考古学・文化人類学からのア
プローチ』 新泉社

文化財保護委員会（1966）『埋蔵文化財発掘調査の
手引き』 国土地理協会

松沢亜生 (1979) 「新たな石器の図化と応用について」『奈文研年報 1979』, 39